

読みを直すだけで終わらせない

考え方と確認例

古語を今の言葉にする

現代仮名遣いに直すことと、現代語訳は別です。例「をかしき花」を「おかしき花」と書くだけでは読みの直しにとどまります。場面に合わせて「趣のある花」など、今使う言葉で意味を表しましょう。

語の意味は文脈で選ぶ

同じ古語でも、場面や対象によって自然な訳が変わります。「文」は手紙を指すことも、書物を指すこともあります。この教材では語注を使い、だれが何をしている場面かを確認めて意味を選びます。

短い文から訳す

例「犬、門の外にゐたり。」なら、犬がどこでどうしているかを順に確かめ、「犬が門の外にいる」と訳せます。まず一つの動作や状態ごとに区切り、最後につながりのよい一文に整えます。

否定やつながりを落とさない

考え方と確認例

否定と禁止を区別する

「行かず」は行かないという否定、「行くことなかれ」は行ってはいけないという禁止です。肯定に取り違えると、内容が反対になります。「ず」「ぬ」「で」などの形を見つけたら、語注と文脈を確認しましょう。

同じ形でも決めつけない

例「舟はまだ来ぬ。」の「ぬ」は否定ですが、「舟は岸に着きぬ。」の「ぬ」は完了です。形だけで全部を否定にせず、どんな動作が述べられているか読みます。この教材は形の名称の暗記より、意味を保って訳す練習を重視します。

文と文の関係をつなぐ

「～て」は動作の順序、「～けれども」は逆のつながり、「～ば」は場面により理由やきっかけを示します。例「雨降れば、道ぬれたり。」は「雨が降ったので、道がぬれている」。語を一つずつ置き換えるだけでなく、前後の関係を確かめます。

必要な言葉を補って自然な訳にする

考え方と確認例

だれが何をを補う

古文には主語や対象の省略がよくあります。「取りて帰る」だけでは意味が伝わりにくい場合は、本文の前後から「だれが何を」を補います。分かることだけを足し、書かれていない気持ちや理由を作り足さないようにします。

程度や指示語も確認する

「いと」などの程度、「ばかり」などのおよその数、「これ」「それ」の内容にも注意します。「これ」を具体的に指定されたら、指している言葉を前に戻って探します。本文にある量や強さを大きくしたり小さくしたりしません。

訳した後の四つの点検

①登場人物と対象を取り違えていないか。②否定・禁止を落としていないか。③理由・順序・逆のつながりが保たれているか。④自然な現代の文になっているか。Aは基礎、Bは標準、Cは応用、Dは8問100点です。解答例と意味が同じなら別の言い方も認めます。

資料と使い方

出典と表記について

本文・訳・設問について

古典原文は保護期間満了の作品からの抜粋。Aの本文は古文の形を用いた教材用作例。現代語訳・語注・設問・解説は本教材独自作成。歴史的仮名遣いを保ち、一部の旧字体や踊り字を読みやすく整えた。省略した箇所は本文の語注に示した。原文の漢字・仮名・句読点は、教科書によって異なる場合があります。

中学2年生が、語注や文脈を手掛かりに古文を読むための教材です。学校や教科書によって扱う作品や順序は異なります。

字数指定のない訳は、必要な意味を保って簡潔に書きます。部分訳は、問いで指定された終わり方に従います。表記や語順が違っていても、内容が同じ自然な現代語は正答です。確認テストの各問の得点は0点を下限とし、空欄は0点です。

枕草子 國文大観 うつくしきもの

[https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=枕草紙_\(國文大観\)&oldid=240238](https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=枕草紙_(國文大観)&oldid=240238)

竹取物語 國民文庫 冒頭

[https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=竹取物語_\(國民文庫\)&oldid=161009](https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=竹取物語_(國民文庫)&oldid=161009)

徒然草 國文大観 第52段

[https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_\(國文大観\)&oldid=240239](https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=徒然草_(國文大観)&oldid=240239)

教材用作例 春の朝

本教材独自作成。古典作品からの引用ではありません。

出典確認日 2026年10月10日。出典の現代語訳・解説・設問の転載ではありません。